

A・MUSEUM

vol.63
[2010.6.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



筑波山（男体山）山頂に咲くオオナルコユリ



実をつけたオオナルコユリ

なるこ 鳴子の音が聞こえそう

筑波山の山頂付近では1mを超える長い茎から、釣鐘型^{つりがね}の白い花を垂れ下げた「オオナルコユリ」を観察できます。オオナルコユリは1924年に筑波山で発見・命名された植物です。名称は「鳴子」といって、カランカランという音で田畑に来る鳥を追い払うのに用いられた農具に花の形が似ていることに由来しています。その白い花が風に揺れると、すずやかな音が聞こえてくるようです。

筑波山は、シダ植物と種子植物を合わせて800種を超える多くの植物が生育する自然の宝庫です。古くから、豊かな自然を求めて多くの研究者がこの地を訪れ、オオナルコユリのほかにモツクバキンモンソウやツクバトリカブトなど、20種ほどの植物が筑波山で発見・命名されています。

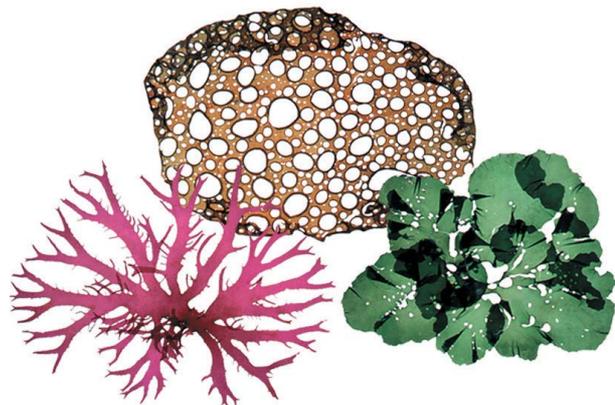
(資料課 小松崎茂)

第49回
企画展

そうだ！海だ！海藻だ！
See Seaweeds! A Cradle of the Sea!
—いのちをつなぐ海の森—

四方を海に囲まれて生活する私たち日本人は、世界有数の、海藻を利用する国民です。もしかすると、皆さんの昨日の夕食にも海藻が食材として使われていませんか。海藻は身近な食材ですが、どんな種類の海藻があるのか、それが海中でどのような姿で生活しているのか、生態系のなかでどんな役割をしているのか、いざ聞かれると意外と知らないことが多いのではないのでしょうか。

さて、海藻はその基本的な特徴によって、緑色・茶色・赤色の3つのグループに分けられていますが、じつは、海中で揺らめく海藻は、3色で分類することができないほどカラフルで美しい色をしています。また、茶色のグループの大型海藻のなかには、「藻場」とよばれる海の森をつくるものがあります。この藻場は、魚や貝をはじめ、さまざまな生きものが暮らす場所になっています。さらに、海藻は、動物の餌となり、産卵場所となることで、多様な海の生きものの命をつなぐ大切な役割を担っています。



海藻おしぼ

(提供：横浜康継)

今回の企画展では、茨城県沿岸や国内の代表的な海藻を展示しながら、海藻の色のひみつ、変わりものの海藻、海藻の祖先、海の森にすむ動物、人による海藻の利用などを紹介し、皆さんに、その知られざる素顔にふれていただきます。どうぞ、展示室の海藻たちにあいにくてください。(教育課 湯原 徹)



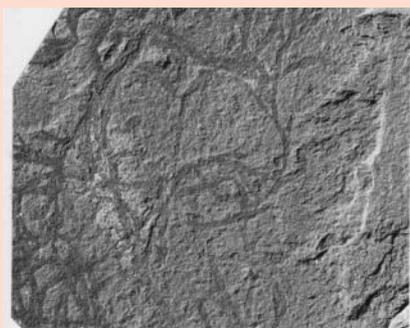
生きているヒジキ

(撮影：中庭正人)



オオバロニア

(撮影：古宮 豊)



海藻の化石

(所蔵：(独)国立科学博物館)



流れ藻につく動物



ノリの採苗

展示構成

- 第1部 海藻の色のひみつ
- 第2部 日本の海藻
- 第3部 海藻へのあゆみ
- 第4部 海の森が育むいのち
- 第5部 海藻の利用
- 第6部 海の森の今

会 期 2010年7月10日(土)~2010年9月20日(月・祝)

開館時間 午前9時30分~午後5時 (入館は午後4時30分まで)

休 館 日 毎週月曜日

※7月19日(月)は開館し翌日が休館となります。

※8月16日(月)は開館し振替休館はありません。

※9月20日(月)は開館し翌日が休館となります。

●記念講座「海藻の色の秘密にせまる」

日時：8月7日(土) 10:00~12:00

場所：博物館内

対象：中学生以上 定員：30名(抽選)

講師：横浜康継氏(南三陸町自然環境活用センター所長)

●記念観察会「乾し海苔をつくろう」

日時：8月8日(日) 10:00~15:00

場所：大森海苔のふるさと館(東京都大田区)

対象：小学生以上(小学生は保護者同伴)

定員：30名(抽選)

参加費：保険料1人につき50円

生物多様性と博物館

～国際生物多様性年1～

皆さんは「生物多様性」という言葉を聞いたことがありますか。田んぼや雑木林など、人と自然の関わりが深い里山は生物多様性が高いとか、同じ遺伝子をもった苗木を植えるスギの人工林は生物多様性が低いとか、そんな場面でこの言葉を聞くことがあります。

「生物多様性」という言葉は、「biodiversity」の訳語で、絶滅する生物種の数が増加していることが大きな問題として取り上げられた1980年代に使われるようになりました。その意味は、ある地域にすんでいる生物の種類が豊富であること（種の多様性）にとどまらず、生物が関係し合っている生態系の種類が豊富であること（生態系の多様性）、ひとつの生物種の変異が豊富であること（遺伝的多様性）をいいます。つまり、「生物多様性」とは、ミクロからマクロへ、遺伝的多様性、種の多様性、生態系の多様性と3つのレベルで考えることになります。

今年2010年は国連が定めた「国際生物多様性年」であり、10月には名古屋で「生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）」が開催されることになっています。つまり、今年、世界でも日本でも「生物多様性」が注目される年、ということになります。

生物多様性を守る試みは、狭い地域や一つの国で考えても実効性は低く、国際的な協力が不可欠です。そ

こで、1992年、ブラジルのリオデジャネイロで開かれた地球サミットにおいて生物多様性条約が可決され、168か国が加盟しました。現在は、この条約に190か国以上の国と機関が加盟し、その内容を検討する締約国会議が2年に1度開催されています。その第10回の会議が今年、名古屋で開催され、日本が議長国の責任を負うことになっているわけです。

ところで、当館の使命のひとつは、地元茨城県において、生物多様性の保全を考え、実行していくことです。開館以来継続している調査研究により、茨城県の自然の現状とその変化を捉え、報告書や展示を通じて県民に伝え、できることから行動に移し、生物多様性の保全に貢献をしています。

今後、当館では、「生物多様性」という言葉を重く捉え、広報や展示で皆さんにその情報をお伝えしていきます。例えば、10月から開催予定の第50回企画展「筑波山」においては、地元茨城県の大切な自然「筑波山」に関する生物多様性を紹介します。

今年度、ア・ミュージアムでは、シリーズで生物多様性を考えていくことにします。（企画課 小幡和男）



2010年 国際生物多様性年

国際生物多様性年のスローガン
 (英語) Biodiversity is life. Biodiversity is our life.
 (日本語) 生物多様性、それはいのち 生物多様性、それは私たちの暮らし



COP10のスローガン
 (英語) Life in harmony, into the future
 (日本語) いのちの共生を、未来へ
 COP10のロゴマーク

夫婦の鏡だ

牛久沼には魚類調査によく出かけますが、そこにひと組のオオハクチヨウの夫婦が年間をとおし暮らしています。いつの頃からいるのか、釣り人などに訪ねてみましたが、4,5年前という方や、それよりずっと前から、とのお返事をいただく方もいますので、不明です。人を恐れず餌をねだりに近寄ってきます。調査の邪魔になるので手で追い払おうとすると「フー」と威嚇します。どのような原因で住み着いたのかはわ

かりません。私が確認してから3年になり、繁殖能力も立派にありそうなペアです。異国(?)の地で子どもや仲間もなく、たったふたりだけの暮らしですが、常に夫が先導し、距離が離れると妻を待ちます。優しさや気配りのできる大変仲の良い夫婦で心が癒されます。女房にも是非みせたいものと考えていますが、何故か躊躇しています。

動物には学ぶべきものがいっぱいあります。

コラム by director SUGAYA

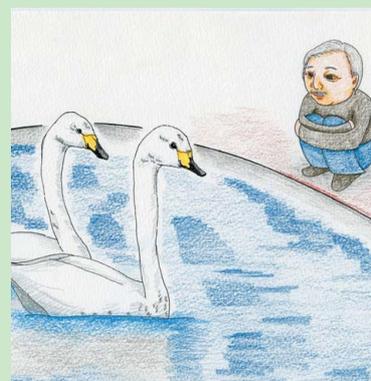


イラスト:太田有香 (ミュージアムコンパニオン)

ニュージーランドでの外来種駆除作業へのイヌの利用

～研究ノート1～

北米原産の外来種であるアライグマが、茨城県でも定着と繁殖をはじめており、今後、在来生態系や農業などへの大きな脅威となることが予測されています。そのため、県では今年度から防除計画を策定してその根絶に乗り出すこととなりました。

さて、この根絶ですが、実際には容易な作業ではありません。特に茨城県のような定着の初期段階にある地域では、アライグマの生息密度が低く、そのために捕獲罠をかけてもなかなか捕まらないことに加え、在来種であるタヌキやアナグマなどが間違っ罠に入ってしまうことが度々起きます。これでは、効率があがらないばかりか、在来の動物へも悪影響が生じ、本来の主旨である在来生態系の保全と矛盾する結果となってしまう。

そこで、駆除の対象動物が低密度の段階における効果的な捕獲方法として、専用のイヌを利用する方法があります。ニュージーランドは外来種対策の先進国で、DOC (Department of Conservation: 環境局) では、ニュージーランドでの外来種であるポッサム、齧歯類、ノブタ、ノネコなどの探索に専用の訓練されたイヌ (predator detection dog) を利用して大きな効果をあげています。今回、10日間と短い期間でしたが、DOCでの探索犬の利用について、カメイ社会教育振興財団からの助成金により研修を行う機会を得ました。場所は北島のファンガレイ地区周辺で、DOCでの探索犬育成のリーダーであるスコット・セオボルド氏にご案内いただきました。セオボルド氏は、ニュージーランド国内のみならず、海外でのこうした探索犬導入についての技術協力も行っており、日本の奄美大島へも、マンガース駆除を目的とした探索犬の訓練のために、何度も訪れたことのある人物です。

探索犬に利用するイヌの種類は、どのような種類でも可能ということでしたが、アライグマのように市街

地にも出現する動物の探索犬としては、一般市民をあまり驚かささない、ボーダーテリアやフォックステリアのような小型のイヌが良いのではないかと、ということでした。また、同じ理由から、リードを付けてハンドラーと常に一緒に行動する必要もありそうです。さらに、ニュージーランドでは探索犬が対象種を見つけた場合、銃器や毒ガスを使って捕殺を行います。日本でアライグマを見つけた後の処置をどのようにするかについて、国内の風土や環境に配慮した方法の開発も不可欠と思われます。アライグマが県下全域に広がる前に、こうした探索犬の導入の実現をぜひ目指したいところですが、まだいくつかの超えなければならないハードルがあるようです。(教育課 山崎晃司)

(右)：セオボルド氏と探索犬のモニタリング用機材。GPSを内蔵した探索犬用首輪と携帯受信機を組み合わせて、探索犬の動きを地図上で随時確認することができる。

(下)：ノネコの探索犬として使われているボーダーテリア。DOCの特別犬であることを示すオレンジ色のベストを着用している。現場ではさらにマズルガード(網状のくちわ)を装着する。



ワカメの色は…？

皆さんは最近、ワカメを食べましたか。ワカメは何色でしょうか。

「緑色」と答える方が多いと思いますが、海の中で生きているワカメは褐色です。ワカメは褐色の藻類＝褐藻類に分類され、熱で褐色の色素が壊れて緑色になります。食用の海藻では、コンブやヒジキも褐藻類です。

当館第3展示室の水槽コーナーを抜けた正面に、3つの円柱形をした展示「海藻の森」があります。その真ん中で、茨城県沿岸に生育してい

るワカメなどの代表的な海藻を紹介しています。茨城県沿岸は、黒潮と親潮がぶつかり合う「潮目」があるため、温海域に生育する種類に加え、北方系・南方系の海藻も生育しています。日本近海には1,500種以上の海藻が生育していて、茨城県沿岸では約160種の海藻が確認されています。

7月10日から第49回企画展「そうだ！海だ！海藻だ！」がはじまります。さまざまな海藻をご覧ください。ぜひご来館ください。

小さな発見ーミュージアムコンパニオンー

(ミュージアムコンパニオン 君山千亜紀)



第3展示室 海藻の森

鹿島灘沿岸のヘッドランドの動物

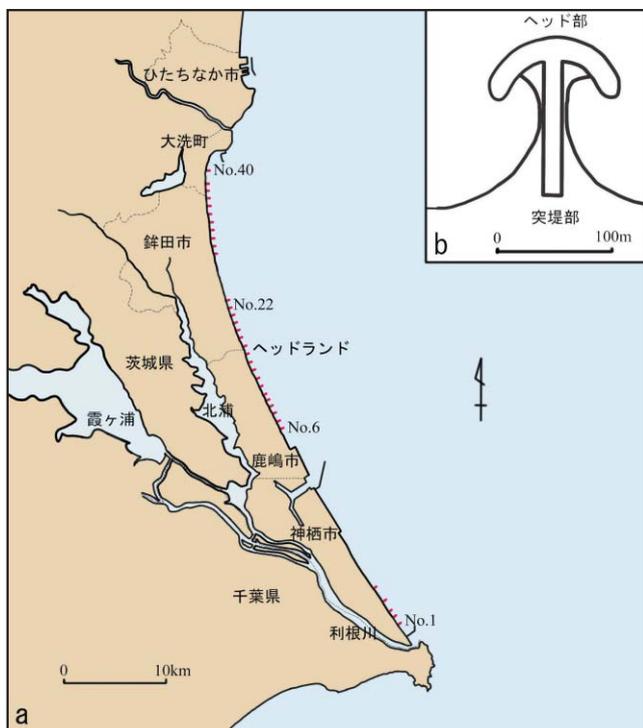
～研究ノート2～

茨城県は、太平洋に面した南北約190kmにわたる海岸線を有しており、大洗岬より南は「鹿島灘」とよばれる遠浅の砂浜海岸が続いています。

鹿島灘では、1970年代半ばから砂浜浸食の問題が表面化し、波による砂浜の流失を防ぐために、ヘッドランド（人工岬）がほぼ1,000m間隔で設置されることとなりました。計画された40基のうち、現在、34基が完成しています。ヘッドランドは全体がコンクリートブロックで覆われており、生きものに安定した基盤や変化に富んだ隠れ家などを提供しています。そのため、そこでは岩礁に似た生態系が形成されています。

茨城県のヘッドランドの生物相は、海藻については詳細な報告がありますが、動物についてはほとんど調

査されていませんでした。そこで、当館では、2006～2008年にかけて「総合調査」の一環として、ヘッドランドの無セキツイ動物相の調査を実施しました。その結果、海綿動物から脊索動物にいたる10の動物門から、132種の無セキツイ動物を確認でき、そのうち、ムツサンゴ、エムラミノウミウシ、スナダコ、スナモチボヤなど、27種が本県初記録でした。今回の結果を含めると、これまで茨城県の海域からは1,200種以上の海産無セキツイ動物が記録されたこととなります。今後さらに未調査地域を調べ、同定作業が進めば、種数が増えるものと思われます。（資料課 池澤広美）



調査地 a: 調査地の位置 (No.6, 22, 40), b: ヘッド部のある一般的なヘッドランド



エムラミノウミウシ (鉾田市で確認)



ムツサンゴ (鹿嶋市で確認)

餌はお団子!?

利根川には、6～7月の産卵期に大群で川をのぼり、時には迫力ある大ジャンプをする姿がニュース等でも紹介される魚がいます。

その魚は、当館の湖沼水槽にもいる「ハクレン」です。この魚はアジア大陸東部原産で、食用として日本に移入されました。おもに植物プランクトンを食べており、口をパクパクさせて常に餌を取り込んでいます。

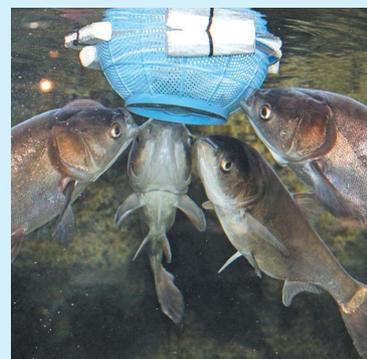
当館では、餌は細かい粒状の配合飼料を与えていましたが、うまく食

べられずに痩せてしまう個体もいました。そこで、好きな時に食べられるよう、水を加えて団子状に練ったものを、ザルに入れて水槽に浮かべて、与えてみました。

はじめは適当な硬さが分からず、飼育員も餌を練るのに一苦労でしたが、今ではザルを見つけるとすぐに寄ってくるようになり、痩せていた個体も体型が元に戻ってきています。水槽をみにきたときは、ぜひこの餌にも注目してください。

おさかな通信

(水系担当 廣瀬南帆)



餌をつつくハクレン

第5展示室展示替え

～展示品・収蔵品紹介～

当館第5展示室では、「人間と環境」というテーマで人間活動によって生じた自然環境の破壊や動植物の絶滅、壊された自然環境を回復する取り組みなどを紹介しています。今回の展示替えでは、「川の流れと浄化作用」のコーナーをリニューアルしました。

私たちのからだに病気やけがを治す力があるのと同じように、地球にも破壊された自然環境を元に戻す力があります。自然の川は、たとえ水が汚れたとしても、いろいろな場所で浄化作用をうけながら流れくたります。今回の展示では、川が水を浄化する作用について、上流で「森の土」、中流・下流で「水生植物」、河口で



展示替えした展示スペース

「干潟の動物」に着目し、標本やパネルなどで紹介しています。

自然環境保全の必要性を多くの人に理解してもらおうとするとき、その危機を伝え、保全活動を介绍することは大切なことです。しかし、人間の力による自然環境の回復は補助的なものであり、最終的にはそれを自然自身の回復力に委ねることになります。展示で紹介しているのは、川がもつ水の浄化作用（回復力）のほんの一部ですが、絶妙なしくみを知っていただき、それを上回るような、人間による過剰な負荷が減ることにつながればと思っています。（資料課 増子勝男）



干潟の動物

日食と月食

日食は地球と太陽の間に月が入り太陽が欠けてみえる現象で、月食は地球が太陽と月の間に入り地球の影で月が欠けてみえる現象です。昨年、日本でもみられた皆既日食は記憶に新しいことでしょう。

さて、2010年最初の天文ショーは、月食でした。新年を迎えてわずか4時間後、西に傾きかけた満月がほんの少し欠けました。続いて1月15日には金環日食がありました。残念ながら日本では、関東地方で食の前に、最西端に近い石垣島でも食が6割を超えた頃日没を迎え、金環をみられませんでした。中国やインドなどで黄金のリングを観測できました。



2010年1月15日の金環日食（中国・雲南省大理）

（撮影：相山今朝男）

日本では今年6月下旬と12月下旬に月食があります。6月は部分月食で、坂東市では19時過ぎに満月が欠けはじめ、20時半過ぎには食が最大（5割程度）となります。12月には皆既月食がみられます。16時20分過ぎに、既に食が進み8割ほど欠けた細い月が夕方、東の地平線から昇る、という不思議な光景を目にできるでしょう。その約20分後に皆既月食となります。1時間ほどの皆既のあと、月が大きく丸くなっていきます。

また、7月には南太平洋の島々などで皆既日食があります。モアイで有名なイースター島では、太陽が13時前から欠けはじめ、14時過ぎに皆既日食となります。その継続時間は昨年のものよりは短くなりそうですが、それでも素晴らしいショーとなるでしょう。

関東地方でも2012年に金環日食、2035年に皆既日食がみられます。2035年、皆さんはいくつですか。無事にみられるといいですね！（教育課 木村正和）

日にち	現象	開始時刻	皆既始め	皆既終了	終了時刻
6/26	部分月食	19:18	20:38(食の最大)		22:00
7/11	皆既日食*1	12:40	14:08	14:13	15:34
12/21	皆既月食	16:23*2	16:40	17:54	19:02

*1 イースター島での時刻（日本で観測不可）

*2 月が出る時刻（すでに食が進み、欠けている）

トピックス

○サイエンスデー「生物・科学の日」

当館では“自然に親しむ日”として、年に4回サイエンスデーを設けています。この日は、どなたでも入館無料となるほか、イベントも多数開催されます。

今回は、5月4日(火、みどりの日)のサイエンスデー「生物・科学の日」に実施されたイベントをご紹介します。

第48回企画展「空の旅人」の展示室内では、企画展ガイド「渡り鳥と田んぼのいきもの」が実施されました。野外の自然発見工房では、コマチダケを使って、自分だけの竹筆をつくった「竹筆をつくろう!」、講座室では、筑波山の成り立ちをたどった講座「筑波山はどうしてできた?—その生いたちをたどる—」、そのほかにも、芝生広場で花のタネの無料配布や野外出入口付近ではグリーンバザー(季節の鉢花の即売など)が実施されました。

当日は、気持ちのいい初夏の陽気に恵まれ、多くの方にご来館いただきました。当館をとおして、生物の持つ面白さや素晴らしさを知っていただき、「博物館」をより身近なものとして感じていただけたのなら、とても嬉しく思います。(企画課 谷田部順子)



企画展ガイド「渡り鳥と田んぼのいきもの」

○「地質の日」を記念して自然観察会を開催!

地質は、地下資源や温泉、美しい景観などの恵み、地震や火山、地滑りなどの災害、建築物の基盤など、私たちの社会や生活に密接に関わっています。「地質の日」(5月10日)はこの地質への理解を通じて自然や環境への関心を高めるために制定された日です。当館ではその記念イベントとして、5月9日(日)に自然観察会「常陸太田の変成岩と鉱物」を開催しました。

当日は心地よい快晴の中、23名の参加者とともに長谷沢を歩いて、黒雲母片麻岩やコートランド岩(角閃石かんらん岩の一種)などを観察しました。また、沢に露出する黒雲母片麻岩をハンマーで割って、ザク石や同じ化学組成をもつ3つの鉱物(藍晶石・紅柱石・珪線石)を探しました。最新の研究では、この地域の片麻岩は約5億年前の「日本最古の地層」が変成作用を受けてできたと考えられています。観察会では、こ

の岩石がたどった5億年について振り返りました。

最初はハンマーでぎこちなく岩石を叩いていた参加者も、だんだんうまく割れるようになり、その断面から鉱物を熱心に探していました。(資料課 小池 渉)



自然観察会のようなす(岩石を熱心に観察する参加者)

○入館者700万人達成

1994年11月の開館から15年4か月が過ぎた2010年3月28日(日)に、当館は700万人目の入館者をお迎えすることができました。その記念すべきお客様は、日立市からおこしの平子さんご一家の長女、真歩ちゃん(4歳)でした。記念式典では、菅谷館長から700万人目の入館証明書が授与され、さらに茨城県教育次長と博物館友の会会長からは、恐竜のぬいぐるみなどのミュージアムグッズやレストランのお食事券がプレゼントされました。続けて行われた記念植樹では、お母さんと一緒にハナミズキ(アメリカヤマボウシ)を植えました。式典が終わって真歩ちゃんからは「はじめてきたけど、またきたい」お母さんからは「新聞などで何百万人記念とかをみたことはありませんが、まさか自分たちがなるとは思いませんでした」といった感想をいただきました。

当館は、これからも800万人、1,000万人のお客様をお迎えし、皆さまに楽しくすごしていただけるよう、いろいろなイベントや展示をしていきます。ぜひ博物館に足をお運びください。1,000万人目のお客様はあなたかもしれません。(企画課 石川 悟)



プレゼントを受け取る真歩ちゃん

韓国国立生物資源館と協力関係が結ばれる



覚書を取り交わした菅谷館長(右)とキム館長(左)



韓国国立生物資源館の外観

このたび、茨城県自然博物館と韓国環境省国立生物資源館(以下「資源館」という。)との間で、協力に関する覚書を締結することとなり、去る3月30日、菅谷館長が韓国に招かれ、インチョン市にある資源館において締結式がとり行われました。

資源館は、研究と展示の機能を併せ持つ施設として、2007年、韓国環境省がインチョン市郊外に設立しました。スタッフの数が200名を超える大きな施設で、韓国での自然史研究の中核的な存在です。当館は、2002年、第24回企画展「コリアの自然史」の開催を機に、韓国の自然史研究者との交流を持ってきました。その後も資源館のスタッフが、設立の準備や運営の参考に当館へしばしば訪れるなど両館の交流は続けられてきました。そんな中、昨年11月に資源館キム・ジョンチョン館長が当館へ視察のため来日したおり、菅谷館長へ協力関係締結の提案があり、それがきっかけ

となって今回の締結に至りました。資源館が日本の博物館と協力関係を締結するのははじめてのこととなります。

今回の覚書の締結は、日韓両国の生物資源に関する研究と展示において、長期的な協力関係の構築をめざすもので、内容は、生物標本の交換、研究者の交流、共同研究の推進、セミナーの共同開催、展示の共同企画などとなっています。

今後は、さきの茨城空港開港を機に、茨城県と韓国との友好関係がさらに深まり、交流が活発になることが期待されます。(企画課 小幡和男)

編集後記

5月22日は「国際生物多様性の日」だったのをご存じですか。当日はマスコミでも話題としており、関心の高さがうかがえました。さて「多様性」といえば、個人的には、この春博物館勤務となり、仕事の多様性に驚いてばかりです。そして皆さんは、次回企画展「そうだ! 海だ! 海藻だ!」で、海藻の世界の多様性に驚かれることと思います。ご期待ください!(T.T)

【交通案内】



〈車ご利用の場合〉

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
〈鉄道・バスご利用の場合〉
- つくばエクスプレス守谷駅下車
～関東鉄道バス「岩井行き」又は「猿島行き」
～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- 東武野田線愛宕駅下車
～茨城急行バス「岩井車庫行き」
～「自然博物館入口」下車、徒歩10分



【開館時間】

午前9時30分から
午後5時まで
(入館は4時30分まで)
※ペット及び遊具等のお持ち込みはご遠慮ください。

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
大人	720円 (580円)	520円 (420円)	200円 (100円)	1,500円
高校・大学生	440円 (300円)	320円 (200円)	100円 (50円)	1,000円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	300円

(注):()内は団体料金(20名以上)
未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。
次の日は入館料が無料です。
●5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
●11月13日(茨城県民の日) ●春分の日
●高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

【休館日】

- 毎週月曜日
- ※6月21日(月)～6月26日(土)は館内整理のため休館となります。
- ※7月19日(月)は開館し、翌日が休館となります。
- ※8月16日(月)は開館し、振替休館はありません。

自然博物館ニュース A・MUSEUM(ア・ミュージアム)

A・MUSEUM (AMUSEMENT+MUSEUM)

企画・編集:ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2010年6月15日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL.0297-38-2000 FAX.0297-38-1999
URL http://www.nat.pref.ibaraki.jp/
E-mail webmaster@nat.pref.ibaraki.jp
メールマガジンも配信中。登録はホームページから

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。